

## <その他>

### 仲間と共に課題解決をし、「人と関わる楽しさ」を実感できる生徒の育成 ～SGEの実践と社会的自立を支えるスキルとの関連について～

大垣市立江並中学校 教諭 高木一範・安田和司

#### 概 要

本稿は、近年の不登校生徒増加という社会課題に対し、学校における生徒の「人と関わる楽しさ」と「社会的自立を支えるスキル」を高める教育実践の有効性を検証するものである。構成的グループ・エンカウンター（以下、SGE）を核とした実践を通じて、生徒が自己や他者への理解を深め、仲間と協働しながら課題を解決していく過程を考察する。特に、社会的自立を支えるスキルの中から重点スキルとした「問題解決のスキル」、「協働のスキル」、「能動のスキル」、「精神安定のスキル」に焦点を当て、SGEの実践がこれらのスキルの向上にどのように寄与したかを、生徒アンケートや活動観察のデータに基づいて論じる。本研究の結果、SGEの実践は生徒の心理的安全性を高め、集団における協働性を育む上で有効であることが明らかとなった。

#### 1. 不登校の現状と研究の目的

##### A：近年の日本の不登校状況について

近年の不登校状況として、不登校児童生徒数は353,970人と12年連続して増加し、過去最多となっている。学校現場では、児童生徒の多様化が進み、学習や生活に課題を抱える生徒が少なくない。いじめや学業不振、無気力、友人関係の不安など、子どもたちが学校生活を送る上で直面する困難は複雑化しており、一人一人に応じた柔軟な支援が求められている。特に、中学校段階では、自我の芽生えと共に他者との関係性に悩む生徒が増え、自分の居場所を感じられず、登校が難しくなるケースも少なくない。そうした中、「不登校」は特定の誰かに起こるものではなく、「誰にでも起こりうること」として捉え直す視点が注目されている。令和6年度文部科学省の資料では、不登校児童生徒数が過去最多を記録し、社会全体でこの課題に向き合う必要性が高まっている。

##### B：西濃学園が研究している『社会的自立を支える10のスキル』について

西濃学園は、不登校や学校に馴染めなかった生徒を受け入れ、自立を支援する教育機関であり、「個」を尊重した多様な学びを保障している。不登校経験のある生徒が安心して通い続け、自分らしく成長できる教育環境を提供している。心理的支援・少人数クラス・体験学習・規則正しい生活習慣などを通じて、「社会で自立できる人」を目指す教育を展開している。学習だけでなく、生きる力を育む場所として全国から注目を集めている学びの多様化学校である。

西濃学園の教育課題として挙げているのが、不登校生徒の登校状況以上に、卒業した生徒が「卒業後どのような進路選択をしているのか」や「社会に出て就労できているのか」である。西濃学園は、卒業生の社会参加の現状について追跡調査を実施し、その分析を行う中で、社会的自立を支えるスキルを10個にまとめた。（表1）

①生活管理のスキル	健康管理、生活リズム管理、金銭・貴重品管理・衛生管理などのスキル
②基礎学力のスキル	教科の成績としてあらわれる学力
③問題解決のスキル	状況や優先順位を検討し計画を立て柔軟に目標を達成するスキル
④協働のスキル	親和、共感、協調、社交、コミュニケーション力、リーダーシップのスキル
⑤責任のスキル	忍耐、誠実、勤勉、役割遂行のスキル
⑥能動のスキル	意欲、積極性、自主性、モチベーション、好奇心、向上性を発揮するスキル
⑦規律のスキル	道徳性、公共性、規律意識、マナーのスキル
⑧精神安定のスキル	自尊心、自己コントロール、ストレスへの対処、レジリエンスのスキル
⑨現実検討のスキル	現実を他者と共有し、現実と願望を調整し、現実を引き受けるスキル
⑩環境調整のスキル	自己理解にもとづき自分に適切な環境（進路先など）を選択・調整するスキル

表1：西濃学園が作成した社会的自立を支える10のスキル

##### C：本校の実態

本実践に先立ち、本校の生徒の学習状況や対人関係、その課題について、教職員にアンケートを実施した。そのアンケートを分析した結果、本校の生徒は全体として素直さがあり、落ち着いて学校生活を送ること、また、学校行事や合唱などに意欲的に取り組む姿があった。

一方で、課題としては、「他人とうまく関われない」、「他人と深く関わることに踏み込めない」などの非社会的な側面が挙げられた。これらの課題は、現在は不登校ではないが、「学校に行くことが辛い」と感じ、今後、不登校になる生徒を増やしてしまう要因と考えられる。本校では、この非社会的な側面の課題解決に取り組む必要がある。

##### D：研究の方向性

本校は、令和6年度より大垣市教育委員会研究

指指定校を受けて、「社会的自立を育むスキル育成事業」を推進している。すべての生徒が仲間と深く関わりながら、安心して学校生活を送れることを目指し、SGEを中心に実践を積み重ね、先に挙げた本校の課題に取り組んでいる。

SGEとは、個に寄り添う支援にとどまらず、学級や学年といった「集団」全体での関係づくりや心の居場所づくりを重視する教育実践である。互いの存在を認め合うことで安心感を得て、自己理解や他者理解、協働的な関係づくりを促進することを目的としている。このSGEの活動を「エナレク（江並レクリエーションの略称）」と親しみを込めて名付け、全校で取り組んだ。

本研究では、エナレクのカリキュラムや指導方法を明らかにし、その成果を市内小中学校に普及・啓発することが目的である。

## 2. 研究仮説

本校のSGEでは、社会的自立を支える10のスキルの中から、特に育みたいものとして「精神安定」「能動」「協働」「問題解決」の4つを重点項目とした。重点項目の設定理由は、次の通りである。

重点項目	設定理由
精神安定のスキル	社会的自立を支えるスキルのすべてに関わる、土台となるスキルである。自分の気持ちを適切にコントロールできる生徒を育てたい。
能動のスキル	仲間と関わろうとする原動力と捉えている。様々な活動の中で「～したい」という願いをもてる生徒を育てたい。
協働のスキル	仲間とうまく関わりながら、話し合いなどに取り組むことができる生徒を育てたい。
問題解決のスキル	目標・目的を設定し、その達成に向けて見通しをもち、粘り強く、問題を解決できる生徒を育てたい。

本校の実践は、浅部（2022）が述べる「社会情動的スキル」（社会的自立を支える10のスキルから基礎学力を省いたスキル）の育成と重なると考え、参考にした。浅部は、社会的自立とは「自らの行動を省察し、他者と協調しながら社会の中で自立的に生きる資質や能力」であり（浅部、2022、130頁）、その育成には「自己の内面を見つめ、他者と共に課題を解決していく経験」を重ねること、「自己の変容を自覚できるような指導の工夫」が必要であると論じている（同、132頁）。

以上の浅部の論を基にして、社会的自立を支え

るスキルを育成するために次のような仮説を立てた。

### 〈研究仮説〉

「人と関わる楽しさ」を生み出すSGEの年間カリキュラムを工夫し、生徒の「気づき」を促す指導を工夫すれば、社会的自立を支えるスキルを育成することができる。

この仮説を検証するために、以下のような評価項目アンケートを作成した。（表2）④に近いほどスキルが高くなっているため、アンケートの数値の変容から、SGEを核とした教育実践によって、社会的自立を支えるスキルが育成されたかどうかを明らかにしていく。

「協働のスキル」リーダーやリーダーでない役割に応じて、班活動や小集団活動（エナレク）の話し合いに仲間と協力して話し合いや活動に取り組むことができる力
①仲間と協力して話し合いや活動に取り組むことが苦手で、上手いいかないことが多い。
②仲の良い人となら協力して課題に取り組むことができる。
③同じ班の人など決められた人となら協力して課題に取り組むことができる。
④誰とでも協力して課題に取り組むことができる。

表2：江並中学校が設定した、社会的自立を支える重点スキルとその評価項目の一部

## 3. 研究内容

研究仮説を受け、以下の2点の研究内容を設定した。

- (1) 「人と関わる楽しさ」を生み出すSGEの年間カリキュラムの工夫
  - ①重点スキルを明確にした年間カリキュラムの作成
  - ②生徒の願いを柔軟に取り入れた年間カリキュラムの工夫
- (2) 「気づき」を促す指導の工夫
  - ①自己理解（自分に「気づく」）を促す指導の工夫
  - ②他者理解（仲間に「気づく」）を促す指導の工夫

## 4. 実践内容

- (1) 「人と関わる楽しさ」を生み出すSGEの年間カリキュラムの工夫
  - ①重点スキルを明確にした年間カリキュラムの作成
 

生徒が「人と関わる楽しさ」を感じながら、重点スキルを高めるために、本校独自のSGEの年間カリキュラムを作成した。（表3）

令和7年度 SGE 年間カリキュラム

月	行事・時期	重点スキル・レクリエーションの名称	学習活動と内容	参考書籍
4月	学期初め 前期研修づくり (縦割り・席替え)	問題解決、能動 「探偵物語 ワークシート」(自己紹介大会)	紙に書かれた「難問項目」に該当する人を探し、名前を書いてもらう。約10分。絶対に嘘を言っちゃいけない。正直に答える。「はい」と言うのは1人1回。一度「はい」を聞いたらもうその人には質問してはいけない。全項目が終わったら出る。 ※ワトソン自己紹介を参考にした。	参考書籍①新編実習指導 対応 エンカウンターで学級活動1 2月号中学校2年生 著：志津 亮彦
5月	ハートフル集会1	協働 「すごろくゲーム」(縦割りエナレク)	グループで、オリジナルのすごろくを行う。順番にサイコロを振り、すごろくボードに止まったマスに書かれたゲームについて話す。時間は20分が目安。友達と話しているときには他の人は口を挟まず、しっかり聞くことを徹底する。時間内にゴールできない生徒がいても、そのまま終了とし、早く終わったグループは2回目に挑戦できるとよい。	参考書籍②どんな学校にも使えるエンカウンター20選 著：明里 希弘
6月	修学大会	問題解決、協働 What did I say?	教師がロパクで、ある言葉を言う。何を言ったか推して確認し、予想した言葉をホワイトボード(タブレット)に書く。※全然分らない場合、ロパクで2回目、3回目を繰り返す。※ここにホワイトボード(タブレット)に書かせ、答え合わせする。やり方がわかったら班で代表者を決め、順番に行う。	参考書籍③中学生・高校生でも盛り上がる！学級レク編選119 著：藤野伸一

表3：SGE年間カリキュラムの一部

年間カリキュラムを作成するにあたり、特に意識したことは次の視点である。

【カリキュラム作成で意識した視点】

- ①学期の初めに、「能動」のスキルを強く発揮できる活動を位置付けること。
- ②その後の計画に「協働」、「精神安定」、「問題解決」のスキルが発揮されるよう活動を構成すること。

物事に取り組む際には、まず、自分の気持ちを表現しようとしたり、自ら行動を起こそうとしたことが前提となる。この前提ができて初めて、課題解決や協働が円滑に進み、集団の安定につながると考えた。

年間カリキュラムを作成するだけでは、毎回のエナレクにおいて、「能動」「協働」「精神安定」「問題解決」のスキルの育成を自然と促すことは難しい。そこで、年間カリキュラムの作成と共に、毎回の活動の中で生徒が意識すべき原則を、「エナレクの心得」としてまとめた。

エナレクの心得

- ①自分と同じように人を大切にする。
- ②話し合いを大切にする。
- ③素直に振る舞う。
- ④全員で協力する。
- ⑤積極的に参加する。

②生徒の願いを取り入れた年間カリキュラムの工夫

研究1年次に、1年生の生徒の振り返りの中に「他学年ともエナレクをやってみたい」という記述があった。この「～したい」という記述は「能動」のスキルの表れである。この振り返りを2年生に伝えたところ、2年生の生徒も「縦割りでやってみたい!」と共感を生み、次年度の生徒会公約として、生徒会が動くこととなった。

重点スキルを明確にして年間カリキュラムを構想するだけでなく、生徒の願いに応じて柔軟に調整した点も特色である。実際に縦割りで取り組んだエナレク「縦割りエナレク(すごろくトーク)」

の内容を以下に示す。

実践事例①：すごろくトーク

〈目的〉

異学年で小グループを構成し、エナレクに取り組むことで、新しい人間関係の中でも活動を楽しもうと協力することができる。(協働のスキル)

〈ルール〉

- ①参加者は、消しゴムを持参し、自分のコマとする。
- ②3年生がタブレットを持参し、ブラウザのサイコロを振る機能を活用する。(3年生が進行役)
- ③1人1回ずつ、サイコロを振り、出た目の数だけマスを進む。
- ④止まったマスに書かれている内容をもとに、自分についてグループの仲間に話す。(写真1)

〈指導上の留意点〉

- ・活動前に「エナレクの心得」を確認する。
- ・止まったマスに書かれていた内容で、「話すのが辛い」と感じた場合には、パスをしてもよい。
- ・仲間の話を傾聴し、リアクションする。



写真1：縦割りエナレクの様子

縦割りエナレクを行ったことで「能動」のスキル、「協働」のスキル、「精神安定」のスキルの育成につながったことが、生徒の振り返りから明らかになった。以下、全校生徒の振り返りのうち一部抜粋し、まとめたものである。(「精神安定」のスキルに関わる記述は水色、「能動」のスキルには黄色、「協働」のスキルには緑色で示した。)

〈1年生〉

- ・初めて他学年と関わって不安だったが、先輩が優しくしてくれて安心した。
- ・知らない人と話せて自信になった。

〈2年生〉

- ・自分から話しかけることができた。
- ・下級生の気持ちを考えながら接することができた。

〈3年生〉

- ・自分が先頭に立って盛り上げようとした。
- ・楽しませたいという気持ちを大切にすることができた。

さらに以下のように、後述する「他者理解」につながる記述も複数見られた。

- ・普段あまり話さない後輩の意外な一面を知れた。
- ・違う学年でも共通点があると分かって嬉しかった。

これまでの年間のエナレク活動を振り返り、このすごろくトークが一番盛り上がり、振り返りの内容も充実していた。おそらく、生徒の「～したい」という願いを大切に、カリキュラムを工夫し、活動を実現させたことが功を奏したと考える。

## (2) 「気づき」を促す指導の工夫

### ①自己理解(自分に「気づく」)を促す指導の工夫

エナレクの指導で常に心掛けたことは、生徒の「気づき」を促すことである。この指導方法を明確にするために、YWT法の原則を用いて実践した。YWT法とは、日本能率協会コンサルティングが開発したものであり、ポジティブに個人の内省を促す目的で用いられる。

#### 〈YWT法に基づく、振り返りの視点〉

##### Y：やったこと

実際に取り組んだこと、起きた事実を客観的に書き出す。

##### W：分かったこと

「やったこと」から得られた気づき、学び、発見を書き出す。

##### T：次にやること

「分かったこと」を踏まえ、次に取り組みたいことを具体的に書き出す。前向きなことを書くことよい。

エナレクに取り組み始めたころ、ワークシートに振り返りを書かせたが、指導する教師によって指導方法が異なり、振り返りの充実度に学級差が生まれてしまった。生徒のワークシートを見ても、ただ「楽しかった」などと短い文章で終わる生徒も多かった。これでは「活動あって学びなし」の状況である。

この状況を改善するために、先述のYWT法を参考に、振り返りを書かせる際に指導する視点を明確にし、次回のエナレクでは、教師が机間指導を行いながら振り返りをさせた。

#### 〈YWT法を参考にした振り返りの言葉がけの例〉

##### Y：やったこと

- ・今日はどのように取り組んだの？
- ・どんな工夫をしたの？
- ・どんなことを話したの？

##### W：分かったこと

- ・どうやったらうまくいったの？
- ・なぜ、その方法でうまくいったの？

##### T：次にやること

- ・仲間との関わり方で生かせそうなことは？
- ・授業中にも生かせることはないかな？
- ・次、どんな活動をやってみたい？

また、振り返り時だけでなく、活動中にも生徒

に意識させることが必要である。そこで、先述の振り返りの言葉がけをもとに、活動中の言葉がけを明確にし、指導を行った。

#### 〈YWT法を参考にした活動中の言葉がけの例〉

- ・うまくいかなかった原因は何だろう。
- ・どんな工夫をするといいだろう。
- ・仲間の気分を上げる声かけをたくさんしよう。
- ・誰が、どんなことを話したか覚えておこう。

これらの指導をすることで、生徒にどのような気づきが促されたのかを、実践事例②「カロリーチャレンジ」を紹介しながら述べる。

#### 実践事例②：カロリーチャレンジ

##### 〈目的〉

グループで合意形成し回答することを通して、自分の感情をコントロールしながら仲間と協力することができる。(協働、精神安定のスキル)

##### 〈ルール〉

- ①教師が5つの食品をスライドにしてテレビに映す。
- ②生徒は、グループで協力し、5つの食品をカロリーの高いもの順に並べる。(2分程度)  
(写真2)



写真2：エナレクの様子

- ③教師が次のスライドで5つの食品のカロリーを提示し、答え合わせをする。

##### 〈指導上の留意点〉

- ・全員が「自分の考えを必ず述べること」と約束事として伝える。
- ・「グループのみんなが納得できる回答をつくる」ことを伝える。

以下に、生徒の振り返りを示す。

・班の人のいろいろな意見を聞いて楽しかったし、新しい発見がたくさんあった。他の人の考えを受けて、人の感じ方は全く違うんだなと思った。班のみんなで「これはここだ！」と一致しても、全然答えが違ったこともあり、面白かった。  
・自分の意見を否定されたらモヤモヤしてしまうことに気づいた。だから、これから班で話し合う場面があったら全員の意見を尊重できるようにする。みんなで「確かに！」「なんでそう思うの？」と話し合うことで、全員が納得できていた。

YWT法を参考にして「気づき」を促す指導方法を明確にし、実践したことで、生徒が自己の感情や行動の変化に気づき、自覚を促すことができた。

#### ②他者理解(仲間に「気づく」)を促す指導の工夫

仲間と協働し問題解決を図るためには、仲間の表情や仕草、発言などから考えを読み取ろうとする姿勢、つまり、相手の様子に気づくこと、「他者理解」が大切である。

エナレクの活動中では、特に、他者理解を促す言葉がけや活動の工夫が重要であると考え、指導した。以下の実践事例③の〈指導上の留意点〉に、実際に行った指導の工夫を述べる。

実践事例③：What did I say？

〈目的〉

活動を通して、仲間の表情や様子に着目することは、協働や問題解決において重要であることに気づくことができる。（協働、問題解決のスキル）

〈ルール〉

- ①各グループの中から1人、代表者を決める。
  - ②代表者は教師のところへ集まり、教師はお題を提示する。（例：アンパンマン）
  - ③お題を理解した生徒は各グループに戻った後、全員起立する。
  - ④教師の「スタート」の合図で、代表者は発声をせず、口形の変化によってお題を示した。（「アンパンマン」と口パクする。）
  - ⑤代表者以外は回答者となる。口形等の変化からお題を当てる。当てることができたグループから着席する。
- ※代表者は絶対に声を出してはいけない。正解した時のみ、「正解！」と言ってよい。

〈指導上の留意点〉

- ・「回答者が不正解だった場合、首を横に振って不正解を伝えてはいけない。表情で不正解を表現すること。」と伝える。（活動の工夫）
- ・代表者の口パクが分かりにくい場合は、「回答者の人たち、代表者にどんな口パクを要求するといいか？」と問いかけ、協働を促す。
- ・「代表者は、回答者の表情をよく見て、今の自分の口パクが分かりやすいかを考えよう」と言葉がけをする。

長期間マスク生活が続いたことによって非言語的コミュニケーションが希薄になっていた現状に対して、この活動は、生徒のコミュニケーション力を高め、互いの変容に気づき合える有意義な機会となったといえる。

〈実践事例③の生徒の振り返り〉

- ・みんなのたくさんの笑顔を見ることができて幸せでした。珍回答「トムクルーズ」が出てきて、先生も笑っていてとてもすてきな笑顔が生まれました。
- ・お題が「江並中学校」で、班で出した答えが「アバマンショップ」で間違えてしまったので、みんな

んなでコツを考えました。結局、全問不正解だったけど、楽しくできてよかったです。

- ・普段あまり話さない人とも関わられたし、班のみんなと笑い合った。

教師が、仲間を向けさせる声かけや、活動を工夫したことで、生徒の他者理解を促し、協働しながら問題解決することの楽しさを実感することにつながった。

5. 成果・課題と考察

エナレクを通して重点スキルが高まったかどうかを判断するため、研究仮説でも述べたアンケートの評価項目に基づき、全校生徒に4件法でアンケートをとった。全体の傾向を把握するために、学年ごとのスキル増減をまとめた表を以下に示す。（対象学年：2，3年）（表4）

問題解決	④	③	②	①
2年生	19% 前回比+1%	61%	9%	11% 前回比+7%
3年生	34% 前回比+5%	55%	10%	1% 前回比-3%
協働	④	③	②	①
2年生	51% 前回比-8%	32%	14%	3% 前回比-5%
3年生	63% 前回比-9%	26%	9%	2% 前回比-1%
能動	④	③	②	①
2年生	39% 前回比+4%	17%	21%	23% 前回比+11%
3年生	40% 前回比-2%	26%	24%	10% 前回比-3%
精神安定	④	③	②	①
2年生	34% 前回比+13%	37%	24%	5% 前回比-1%
3年生	31% 前回比-5%	34%	29%	6% 前回比+3%

『学年ごとのスキルの増減（表4）』

重点スキルの内、「問題解決」と「精神安定」のスキルで向上した。向上したスキルもあれば、後退したスキルもある。特に、エナレクの活動を通して、大きく増減に関係したわけではなかった。しかし、どのスキルも微増ではあるが上昇したと言える。

次に、抽出生徒に関するスキルの変化を示す。（表5）なお、QUの結果や今までの学校生活で不登校傾向にある生徒13人を選んだ。抽出生徒の中でも、スキルの上昇が顕著に見られた4人を結果である。

令和6年度 入学	問題解決 のスキル	協働 のスキル	能動 のスキル	精神安定 のスキル
生徒A	1↓↓	3↑	2↑	3↑↑
生徒B	4↑↑	4↑↑	4↑↑	2
令和5年度 入学	問題解決 のスキル	協働 のスキル	能動 のスキル	精神安定 のスキル
生徒C	4↑↑	4↑↑	4↑↑	4↑↑
生徒D	3↓	4↑	2	3

抽出生徒に関するスキルの変化(表5)

抽出生徒の重点スキルの数値は、全体的に増加傾向となった。全校的な傾向と比較しても、おおよそ2段階向上した項目が複数あり、本実践が生徒の変容に一定の効果をもたらしたと言える。

#### ○成果▲課題

- 重点スキルとのつながりを考えたSGEを実践したことで、生徒の振り返りにおいて、「授業が楽しい」、「みんなと考えると分かる気がする」など肯定的な意見が多く見られた。
- 生徒の思いに柔軟に対応しながら、SGEを実践したことで、異学年交流を楽しみながら行い、様々な活動を行うことができた。
- SGEの活動で、YWTの原則を活用して、自分の特徴に気づく指導を行ったことで、自分の性格や考え方を見つめることに効果的だった。
- SGEの活動で、相手の思いに気づく指導を行うことで、相手がどんな様子なのかを確認する力が付いた。
- ▲教師間でSGEの「ねらい」や「問いかけの質」への理解の差があったため、活動が「楽しさ」や「イベント性」に偏ると、学びの内実が浅くなる恐れがある。教師間で共通理解を図り、実践していく必要がある。
- ▲「精神安定」のスキルなど一部のスキルでは高まりはあったが、他のスキルについて活動の成果が一部の学年・学級にとどまり、学校全体での体系的な広がりには欠ける。
- ▲スキルの評価方法が、自己評価の高まりで行っているため、複数の教師などによる継続的な見取りを考える必要がある。

#### 考察

本研究では、SGEを核としたエナレクの実践を通して、重点スキルの数値の変容について検討した。その結果、全体として顕著な数値の上昇は見られなかったものの、「問題解決」および「精神安定」のスキルにおいては、学年や個人によって一定の増加傾向が確認された。特に、縦割りエナレクやひびき合い集会など、異学年との関わりを意図的に位置付けた活動では、生徒が自分の役割を意識しながら他者と関わる姿が多く見られ

た。(写真3)こうした経験が、生徒の心理的な安心感の形成や感情のコントロールにつながり、「精神安定」を土台とした「問題解決」のスキル向上に寄与したと考えられる。



写真3:ひびき合い集会の様子

一方で、「協働」や「能動」のスキルについては、学年や学級によって成果に差が見られ、学校全体としての大きな伸長には至らなかった。これは、SGEのねらいや問いかけの質に教師間で差があったことや、活動が楽しさに偏った場合、生徒一人一人の内省が十分に深まらなかったことが影響していると考えられる。ただし、生徒の振り返りには、「仲間の考えを知ることができた」、「人と関わるのが楽しいと感じた」、「相手の気持ちを考えるようになった」といった記述が多く見られ、自己理解や他者理解につながる「気づき」の質が高まっていたことがうかがえる。YWT法を参考にした振り返りの視点や、活動中の言葉かけの工夫は、生徒が自分や仲間を意識的に捉えることを促す上で効果的であった。

以上のことから、「人と関わる楽しさ」を生み出すSGEの年間カリキュラムと、生徒の気づきを促す指導を工夫することで、社会的自立を支えるスキルの育成につながるという本研究の仮説については、一定の妥当性が示せたと言える。

#### 6. 参考文献

- ・令和5年度 学びの多様化学校 西濃学園教育報告書
- ・令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要(文部科学省)
- ・浅部航太(2022)社会情動的スキルの育成が求められる背景と育成の在り方の検討

<講評> (最終頁の最後11行は空白とすること) 1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11